

大学卒業後、名古屋市にて会社勤務、1998年退職。

## 広げよう「小さな勇気」の輪

それは、春先の昼間の地下鉄の車内で始まったことだった。込み合うほどではなかったが、座席はほぼ満席で、私を含め数人が立っていた。途中の駅で荷物を手に乗ってきた私と同年輩の女性は、少し足が不自由なようで杖をついていた。座らせてあげたいと思ったが空席がない。だがよく見ると高校生らしい2人組みが座っていて、1人は荷物を足下に置いているが、もう1人は横に置いて座席を余分に占領している形だ。腕組みをして目をつぶっており、荷物をどけて座らせてやろうという雰囲気はない。

女性を見かねて、私は思わず「その荷物、下に置いてこの人を座らせてやってよ」と声を掛けてしまった。言いながら、常々家で妻から「街頭や駅や乗り物の中で、非常識な若者を見ても正義感から注意などしてはだめよ。殴られたり、時には刺されたりもする怖いご時世なんだから」と言われて、いわゆるジベタリアンなどに不快感を持ちつつも黙って通り過ごしているだけに、この口癖を思い出し、一瞬背筋に冷たいものを感じていた。が、高校生はしぶしぶという感じながら黙って荷物を足元に下ろし女性を座らせてくれた。妻の顔を思い浮かべ、ホッとした。

女性は高校生にも、私にも深く頭を下げて、自分の大きめの荷物を膝の上に置いてうれしそうに着席した。民謡の会に出かけるのです、という。杖をつかいながらも元気に生きているお年寄りの1人なのだ。そして偶然、私の降りた都心の駅で彼らも女性も下車した。

すると、出口が同じだとわかった2人の高校生が、なんと、杖を持つ女性の荷物を持って歩き始めたのである。女性は遠慮した

が「一緒だからいい」とぶっきら棒な若者らしい言い方で答えて、すたすた階段を上がっていく。

聞けば、部活で練習試合に行くのだとか。態度に現わすのは苦手のようだけど、接してみれば優しく気のいいヤングなのだ。荷物を両手に抱えて前を行く2人の若者の姿に胸が熱くなった。若い衆、捨てたものじゃない。

本当に小さな勇気だったけれど「座らせれくれないか」という、私などには言えそうでいままで中々言えなかった「ひとこと」をひよんなことから思い切って発したことで、若者と後味のいい爽やかなコミュニケーションを生むことができた。礼を言って別れたが、うれしい一日だった。彼らも多分、少し良いことをしたという気持ちになってくれたのではないだろうか。私もこの小さな出来事を機に、若者に声をかける勇気が生まれてきた。

若者を接する前から「信用できぬ」「ジコチューで怖い」と総括して積極的に会話しようとしなない私たち高齢者。でも、優しい若者だって沢山いるはずだ。事なかれで腰を引いているばかりでなくて、時には若者と老人が進んで声を掛け合って心を通わせることも、今の世の中、少しは住み易く、あたたかい街づくりに繋がっていくのでないかと思ったことである。

声を出そう、声をかけよう、住みよい街にするために。反省を込めて私は今、趣味の会で、地域の集まりで、機会を見つけて、この輪を広げることに喜びを感じつつ、実践に励んでいる。

みんなが小さな勇気を持つ。それが大きな勇気に繋がる。そう信じたい。ささやかな体験が私をちょっぴり変えてくれた気がする。

(了)